
雪華

火向 棗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪華

【Nコード】

N8621L

【作者名】

火向 棗

【あらすじ】

目が覚めたら知らない場所！？もののけ扱いされるわ睨まれるわ・・・どうすればいいのよ？
くーるびゅーていーなイケメンが保護者になってくれたけど、「女は家で大人しくしているものだ」だぁ？ふざけんはずっとじっとなんてしてたら身体が鈍っちまう！

キレると男勝りになってしまふ少女と、顔と頭は良いが少女にたじたじしてしまう青年の、京を巻き込んでしまつかも？なドタバタラ

人物紹介

・旭 あさひ
雪乃 ゆきの

現代では『武家の末裔』

元氣いっぱいの小学6年生

13歳

自由気ままで猫のような感じ

大きな瞳に愛嬌のある顔立ちをしている

表情がコロコロと変わり、気分屋

意外と甘えたがり

頼久について、内裏に行くこともしばしば・・・

・源 みなもとのよりひさ
頼久

蔵人と頭の中將を兼任する将来有望の若者

18歳

現代でいうと・・・

『クールビューティ』??な容姿

雪乃と出会ってからは、

優柔不断?へタレ?

なんか押され気味

チヨロチヨロと動き回る雪乃にハラハラしっぱなし

保護者のようなたち位置を、どうやって変えようかと日々考え中

前は縁談の断り方に悩んでいたが、現在は雪乃の鈍感さに頭を悩ませ中

・・兵部卿宮 光鷹

帝の血筋を引く貴公子

頼久の友人

恋多きお方

頼久から聞く雪乃の様子に興味津々

宮中での人気が高く、帝の信頼も厚い

頼久とは彼の母親を通じて知り合い、それ以来親しくしている

第一話

目が覚めると、知らない場所に寝てるって………アリですか？

「………あり？ここ、どこ？」

目を開けると、真新しい木目が視界に広がっていた。思わず上体を起こそうと身体に力を入れたが、全身が重く力が入らない。

「ん~~~~」

手をパタパタと動かし、寝かされている布団を叩く。首を左右に振り、周りの状況を確認める。

そこで、

「ん？なんか枕がう………ピヨちゃん……？」

首を乗せているものが、普段愛用している『ピヨピヨまくら』ではないと気づく。

感じるそれは、固く小さい。

柔らかくて頭を包み込むほどのピヨちゃんとは大違いだ。

(・・・なぜにピヨちゃんがない?)

キヨロキヨロと首を動かし、黄色を探す。

だが、どこにもそれらしきものは見当たらない。

「・・・ピヨちゃん・・・?どー?」

当然、返事無し。

ピヨがいたとしても、枕だから話せるわけがない。

わかってはいるが、問い掛けに応える声がないのは淋しい。
ましてや、今自分がいるのは見覚えのない場所。

「・・・ふえ・・・っ」

「目が覚めたか?」

涙が溢れ、視界が歪みはじめた頃、凜とした声がかげられた。

「・・・っ・・・ふ?」

声がした方向に顔を向ける。

そこには高校生くらいの男の人が、着物姿で立っていた。

「おにーさん、だれ？」

「お前こそ、何者だ」

「どろちゃって屋敷へ入った？」

「……………はい？」

『どろちゃってって、気がついたらこの場所で寝てたんですよ』

そう言えたらどんなに楽だろう。

だが、言ったとしても信じてもらえそうにない雰囲気だ。

彼を取り巻く空気が信じられないほど冷たい。

(な、なんでこんなに怒ってるの?)

びくびくと怯えながら彼を窺うが、追及の視線が途切れることはない。

「答えられないのか？」

「あー」

「なんだ？」

「どこどこでしょう？」

とりあえず、自分がいる場所の名前を知っておきたい。

「……俺の屋敷だ」

いや、聞きたいのはそんなんじゃないんだけど……。

ついさっきまで、不安で泣いていたとは思えないほど苛ついてきた雪乃。

「お前は突然、庭にある池に現れた。前触れもなく、まるで物の怪のように」

ブチツとなにかが切れたのを、雪乃はどこか遠くで感じていた。

「……『物の怪』?」

ムクリと起き上がり、ジトツと男を睨みつける。

「だあゝゝるえがあ物の怪じゃあー!!!」

近くまで来ていた男の胸倉を掴み、怒鳴りつけた。

「わたしには、雪乃って名前があるのっ! 『お前』でも『物の怪』でもない雪乃なの!!!」

立ち上がり、精一杯彼を威嚇する。

「だいたい、何でここに居るのなんて、わたしも知らないもん! ちゃんと家にいたんだからっ」

最後の方は、涙声になっていた。

言いたいことを言い終わり、荒い息を吐き出す。

俯いて、唇を噛み締めた。

ポロポロと涙がこぼれ落ちる。

男は黙って雪乃を見つめていた。

身体を震わせ嗚咽を堪える彼女が、怪しい者とはどうしても思えなかった。

「……………わるかった」

気づけば、自然と口から言葉が出ていた。

「俺は源頼久。この屋敷の主だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8621/>

雪華

2011年9月27日20時31分発行